

「戦争と平和について ～中東の平和の考えながら～」

現在も、イスラム国（IS）とイラク・シリア、そしてアメリカ・ヨーロッパ諸国の対立は続いている。2014年に独立を宣言したイスラム国は、昨年からの空爆強化や経済的制裁によって確実に勢力が弱まっている。しかし、追い詰められたイスラム国が、今後テロ攻撃による反撃を試みることが予想され、まだまだ世界の混乱は続きそうである。今後、イスラム国は、アメリカやヨーロッパ諸国の攻撃によって崩壊することは間違いない。しかし、イスラム国崩壊の後に、平和が来るのだろうか。そこで、私たちは、イスラム国を調べながら、戦争とは何か、平和とは何か、について考えることにした。

イスラム教とは、どのような宗教なのか。本当に私たちは理解しているのだろうか。最初にイスラム教について調べを進めた。イスラム教は、仏教、キリスト教と並ぶ3大宗教であり、現在、20億人の信者を持つキリスト教に次いで、世界で2番目に多い16億人の信者がいる。イスラム教は、610年、アラビアの商人であったムハンマドが創始した宗教で、「アッラー」を唯一の神とする一神教である。聖典は「クルアーン」で、六信五行と呼ばれる義務が課せられおり、信仰と生活が非常に近いという特色がある。イスラム教を調べていくと、イスラム教の特徴として、非常に高い平等性があることがわかった。例えば、5つの信仰のつとめである五行の中は、「喜捨（ザカート）」というものがある。

「喜捨（ザカート）」は、富めるものが貧しいものに財産をわけあたえることであり、お金を儲けた者は貧しい人たちに寄付をしなければならない義務が課せられている。同じ理由でイスラムの銀行には利子という考え方がないことも分かった。また、キリスト教にあるような牧師や神父、仏教で言うお坊さんという特別な存在は、イスラム教にはいない。イスラム教には、イスラム信者はすべて平等であるという考え方がある。そして、イスラムの都市にあるアパート、お店、公衆トイレ、公衆浴場等の公共施設等は裕福な商人たちが出す信託財産（ワクフ）によって維持されたことも分かった。このように、イスラム教は、非常に平等性の高い宗教であることが分かった。しかし、イスラム教で誤解を生みやすい考え方もあることも分かった。まず、ジハードである。ジハードは、本来は自分と悪との戦いをいうものであったが、次第にイスラム教を守るための聖なる戦いを意味するようになり、現在は自爆テロの理論的な根拠ともなっている。そして、イスラム教の中のスンニ派とシーア派の対立である。調べていくと、キリスト教よりも、イスラム教の方が宗派を巡る対立はないことが分かった。現在の国家の対立に巻き込まれるようになり、次第に宗派の対立が激化したのである。

なぜ、イスラム国（IS）が成立したのか。これは中東の近現代の歴史と深く関係していた。第1次大戦後、イギリスなどのヨーロッパ諸国は、中東を分割して、自国の勢力範囲を勝手に決め、国境線を設定した。それは、中東に住んでいたアラブ人等の期待を完全に裏切るものであった。そして、1920年代に、中東に膨大な石油が埋蔵していることが分かると、イギリス、アメリカを中心とする欧米諸国は、中東諸国に石油支配のために政治介入していった。しかし、そのような行動は中東諸国の反発をかき、ついには、1979年、イランで反欧米を訴えたイスラム革命が起きることになった。イスラム革命の中東諸国への拡大を恐れたアメリカやヨーロッパ諸国は、イラクのサダム・フセインを支援

し、10年近くにも及ぶイラン・イラク戦争が起きることになる。アメリカの支援によって巨大化したサダム・フセインは、次第に反アメリカに動くようになる。そこで、アメリカはイラク打倒に向けて、湾岸戦争・イラク戦争を仕掛けることになる。最終的に、アメリカはサダム・フセインを打倒することはできたが、膨大な軍事費用のために、自国の軍隊をイラクから撤退させざるを得なくなり、イラクには政治的な空白地帯が生じることになった。そのイラクの政治的な空白地帯で生まれたのが、イスラム国なのである。2006年、イラクに生まれたイスラム国は、2010年、アブー・バクル・バグダーディーが指導者となる。そして、イラク国内で、スンニ派とシーア派の対立を利用して、勢力を拡大していった。また、バグダディーは、内戦で苦しむシリアにも進出し、第1次世界大戦で、欧米が勝手に決めた国境線の変更を訴え、2014年、イラク・シリア・イスラム国を名乗り、独立宣言をすることになる。イスラム国の現状は、恐怖政治で住民を支配するものである。征服した町で異教徒を大量殺害し、子供を自爆テロ要員や人身売買の対象としている。イスラム教の教えを強要し、違反者には厳罰を科している。恐怖で、自らの行動を正当化し、住民を支配しているのである。

最後に、戦争とは何か、平和とは何かについて考えた。私たちは、当初、戦争とは、「武力を用いて戦うこと」という位にしか考えていなかった。そして、平和とはと聞かれ、「戦争のない状態」と考えていた。平和が「戦争のない状態」とすると、平和とは「戦争がない」だけで、常に戦争につながる要素がそこにあることになってしまう。それを、本当に平和というのだろうか。平和とは、一人ひとりが自己の可能性を信じて、他者と協力しながら、その可能性を追い求めることができる状態であると考え。では、戦争とは一体どのようなことなのか。コミュニケーションの枠で戦争を考えみたい。戦争とは「武力を用いて、自国の意思を無理矢理に伝達する」ものととらえることもできる。しかし、本来コミュニケーションは、自分と他者との考えを共有するための手段であり、意思の疎通や相互理解を経て、はじめてコミュニケーションが成立したということになる。つまり、一方通行である「強制」のコミュニケーションは存在しないのである。

「人間は、社会的動物である」とアリストテレスは言っている。人間は一人で生きていくことはできず、社会を構成し、他者とつながっていくことが必要である。他者とのつながりで必要なものが、コミュニケーションである。つまり、我々人類はコミュニケーションを否定することができないのである。戦争をするということは、コミュニケーションを否定することであり、社会を構成せず、意思疎通をしないで、一人で生きていくということになってしまう。

今、私たちにできることは何だろう。一方的に相手を排除した入り、あらゆる差別や偏見をもって接することをやめよう。そして、傍観者になることはやめよう。コミュニケーションを続ける努力をし、相手を認め、相手の立場を理解する努力をしよう。コミュニケーションは、共に生きるための道具である。これからは、「共生」のコミュニケーションが大切になってくる。